

「グローバルCOEプログラム」（平成20年度採択拠点）事後評価結果

機関名	熊本大学	拠点番号	F13
申請分野	医学系		
拠点プログラム名称	エイズ制圧を目指した国際教育研究拠点		
中核となる専攻等名	エイズ学研究センター		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)満屋 裕明		外 10 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は十分達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、「地域に根ざし、国際的に存在感を示す大学」を目指して、学長を議長とする総合企画会議で基本方針を策定し、本拠点を「拠点形成研究」に選定し、学長のリーダーシップのもとに、学内予算措置、研究スペースの改修、教員ポストの確保や大学院博士後期課程学生や私費留学生を対象とした奨学金制度の創設などの支援を行った点は評価できる。

拠点形成全体については、エイズというひとつの感染症に焦点を絞り、比較的少ないメンバーで国際教育研究拠点の形成を行い、我が国のHIV研究レベルを国際水準に高めるのに貢献した。HIV感染者数が少ないため、我が国のHIV研究体制（研究費、研究者数）は国際的に卓越しているとは言えない状況であったが、拠点リーダーの奮闘により人材育成面でも研究面でも、目的が達成された。運営面でも、海外研究者による英語による評価（site visit）を反映させるなどの工夫も行った。

人材育成面については、HIVの研究を志す大学院学生が増加し、「エイズ制圧を目指した研究者養成プログラム」においては、所属する外国人留学生が半数を占めることとなった点や、大学院博士課程の講義・実習を英語で行っている点などは評価できる。また、海外リエゾンラボに9名の大学院博士後期課程学生・若手研究者が派遣され、国際レベルでの人材育成が行われたことや、卒業生が国内外で教員・研究員として活躍していることも評価できる。

研究活動面については、新規抗HIV剤の開発とHIV-1の細胞障害性T細胞からの逃避の機序とその逃避変異の蓄積を明らかにした研究は、国際的にも高く評価される。前者の創薬は米国NIHでも国際共同研究を率先して進め得られた成果で、グローバルCOEに相応しいと評価する。また、他にも多くの国際共同研究が実施されていることや、アジア地域でHIVコホート研究を行っていることも評価できる。一方、拠点リーダー以外の事業推進担当者の研究成果は、少数を除いては、競争が激しくかつ層の厚いHIV研究の国際レベルから考えると、一層の努力が期待される。

今後の展望については、本拠点は、熊本大学に大きなインパクトを与えたものと思われ、補助事業終了後も大学からの経費面における支援が継続されている。今後、大学として、本拠点で取得した様々な国際共同研究をするための技術を「国際先端医学研究拠点」に適用させることを計画しており、HIV研究と共にどのような分野を目指すのか注目したい。